The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ ゲーム読み物

ソニックの大冒険

作／寺田憲史　絵／おちよしひこ　©1991 SEGA

ソニックたん生の秘話・後編

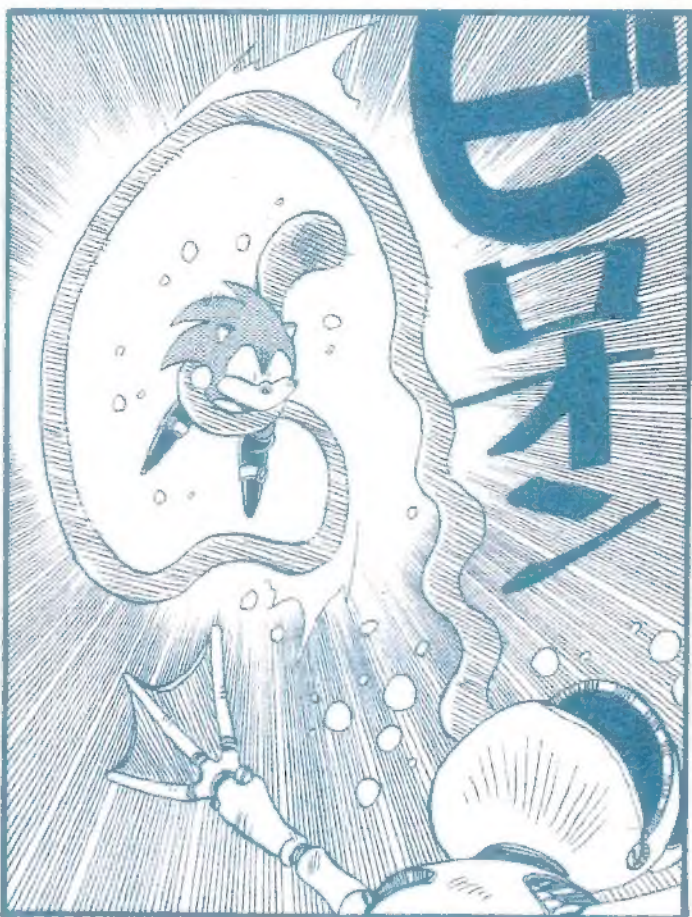
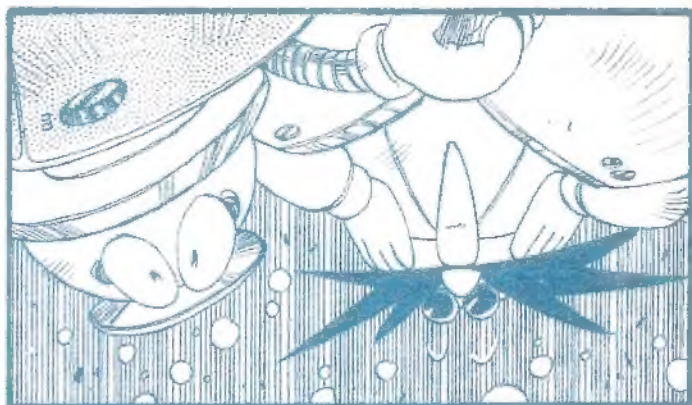
「どぉ～りゃぁ～！ ローリング・アタック～ッ！」

とつじょ飛び出した青いイナズマ、ソニック・ザ・ヘッジホッグは、まさに目にもとまらない、っていう速さで巨大メカ・ガエルにいどんでいきます。

でも、そのカエルの中では、ドクター・エッグマンが高笑い。

「ぬはははは～～～！ 待っていたぞ待っていたぞ、ソニック・ザ・ヘッジホッグよ！ 今日こそ、キサマをつかまえてやる！ それ、オムレッツ！」

パシッ！ ドクターは、そうじゅうかんをにぎるオムレッツの肩をたたきました。

「アイアイサ～！ だなや。」

パコ！　ブシュ！　ピポポ……！　オムレッツが、コックピットのボタンを次つぎに押していきます。ソニックをつかまえるのに、何度か失敗しているエッグマン。今度は、ゼッタイの自信がありそうです。

「そ〜れ、世界最強の科学者、ドクター・エッグマンの開発した宇宙一の捕獲メカ、〈カエルンバ〉の威力を見よ！」

「見よルンバだなや！」

カエルに飛びげりをくらわせようとしていたソニックに、ベロ〜ン！　カエルの口から長ぁ〜いベチョベチョのベロが伸びていきました。

「あっ、あぶない！　ソニック！」

エミーが思わず目をおおいます。

ベロンチョ〜！　ソニックはあっという間に〈カエルンバ〉のベロに巻きこまれてしまいました。

どうやら、ベロに付いているベチョベチョのものが、強力なノリになっているようです。ソニックが、カエルのベロの中でひっしにもがいても、カンタンにはぬけだせそうもありません。

「ぬぁ〜っははは！　やりおったぞい、〈カエルンバ〉！」

「ドクター、さすがだなや〜。」

でも、その次のしゅんかん、ドコォ〜！　メカ・ガエルのコックピットはまっさかさま。エッグマンとオムレッツもひっくり返ってしまったのでした。

「ギェ〜！　なんだりあ〜？」

ズッコケたまんまのオムレッツが、悲鳴をあげたのもムリはありません。

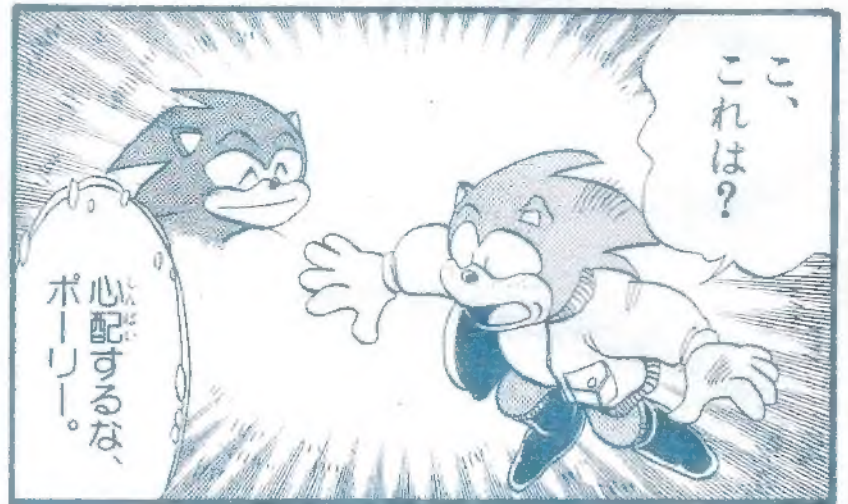
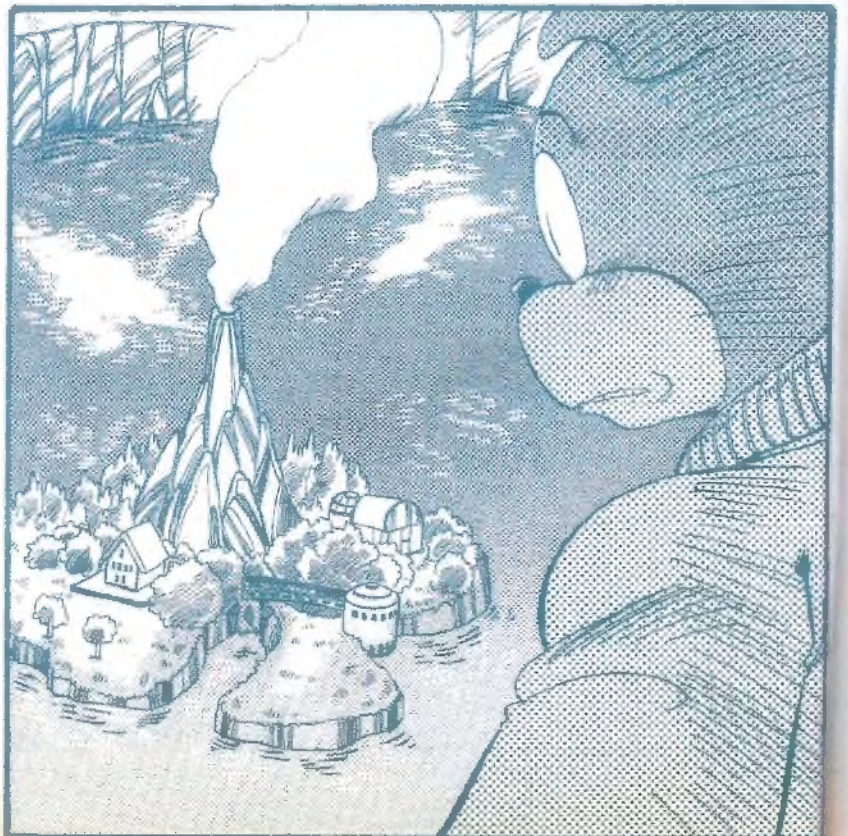
ソニックは、カエルのベロに巻きこまれたまま、ものすごい勢いで飛び、なんと！　カエルのベロをビロンビロンに伸ばしてしまっていたのでした。

「ヘッ！　こんなもんでオイラをつかまえられっかよ！」

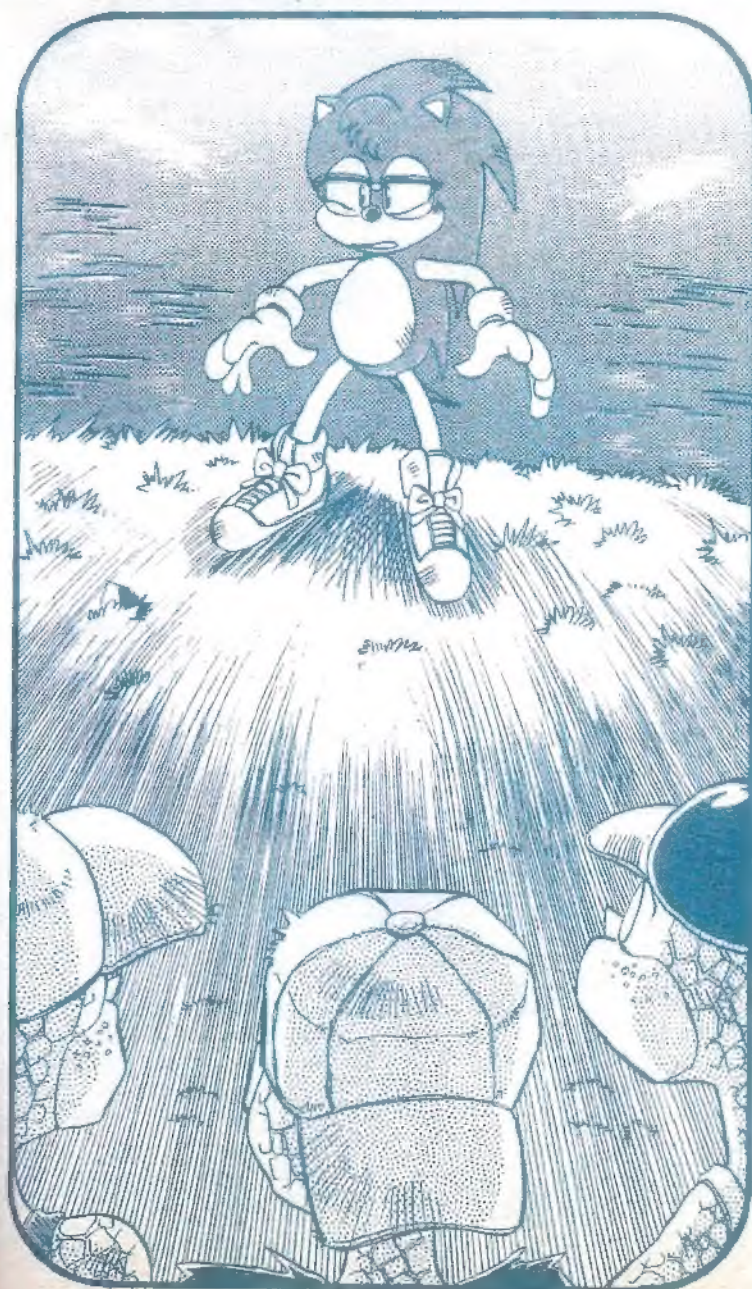
さあ、ソニックの反撃が開始されました。

「す、すごいパワーだ。……だが、あれが、ムスコのニッキだって？」

今まで、ソニックの活躍を見ていたポーリ

ーが、あらためて空中にうかぶ青い光の玉のほうを見ました。
すると、その光の中に、ぼうっとなつかしい顔がうかび上がるではありませんか！
ポーリーは、思わず大きな声で叫びました。
「ソニック・ジョー！」
そうです。それはまさに、十数年前に死んだはずの親友の顔だったのです。
「ひさしぶりだな、イナズマ・ポーリー。いつかは、お前がここに来るだろうと思っていたぜ。さぁお前のムスコ、ニッキの秘密を教えてやろう。」
ソニック・ジョーがそう言うと、青い光の玉はみるみるうちに大きく広がっていき、またたく間にポーリーを包みこんでいったのでした。
「こ、これは？」
「心配するな、ポーリー。お前にちょっとオレの世界まで来てもらうだけさ。」
「お前の世界？」

「ああ、光速を超えた世界。ソニック・ワールドにな。」
「――――！」
ポーリーは、青い光の中で、自分の体がフワフワとういているような気分になっていきました。そう、まるで、雲の上を歩いているようなステキな気分です。
でも、ふっとはるか下のほうを見ると、見覚えのある光景が見えます。

いいえ。見覚えがあるなんてもんじゃありません。あれは、ポーリーの住んでいるヘッジホッグ湖で、その真ん中にあるホッグホッグ島ではありませんか！
そしてさらに、何人かの子どもたちが岸壁のところで遊んでいます。
「あぶないな。だれだ、こんなとこで遊んでいるのは？」
ポーリーは、思わずつぶやきました。するとまた、ソニック・ジョーが語りかけてきま

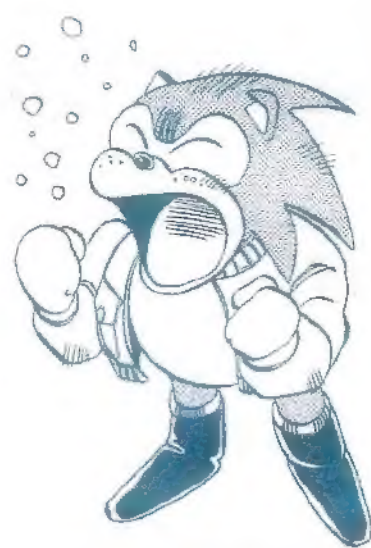
した。
「いや、遊んでいるんじゃない。ケンカしてるのさ。」
「え？」
ポーリーと同じ青い光の輪の中に、いつの間にかソニック・ジョーが立っていました。
「ソニック・ジョー！」
ジョーは、ちょっとテレたようにウインクをしました。これは、カレのクセなのです。
「しかも、一対四。岸壁に追いつめられているのが、そのたった一人のヤツで。……ポーリー、お前のムスコさ。」
「え？　ニッキ？」
ポーリーはおどろいて、真下の光景に目を見張りました。たしかに、ニッキです。でも、今のニッキよりずっと年上です。

「今から六年後。つまり、ムスコが十六才になった時のことだ。ニッキのヤツ、町の不良どもにさんざんたてつくもんだから、ご覧のとおり追いつめられてるってわけだ。」
その不良というのは、ポーリーも時どき見かける連中です。長男のアントンを親分にしたベルーカ・ブラザースです。
ジョーの話は、こうでした。
ベルーカ兄弟がある悪いことをしたのですが、ニッキはそれを知らんぷりできません。実は内心怖くて仕方ないのですが、ある言葉を聞いたために、ひっしに戦っていたのです。
「ある言葉って？」
ポーリーが聞きました。
「オヤジの言葉さ。」
「オレの？」
「そうさ。……ニッキ、怖くても立ち向かわなくてはならない時がある。その時、逃げたために、一生後悔することだってあるからな。……ポーリー、お前さんがそうムスコに言ったんだよ。」
「――！」

それで、ニッキはここまでがんばってきたのです。

でも、それもここまででした。ニッキは、ベルーカ兄弟のしつこい攻撃にあって、ついに岸壁からまっさかさまにおっこちてしまったのでした。

「ニッキ〜!」

ポーリーは、叫んで身を乗り出しました。でも、次のしゅんかん、今まで見えていたホッグホッグ島の光景が、パァ〜っと青い光の中にかき消えていってしまったのです。

天国に消えた青い光

「ニ、ニッキ!」

「安心しろ、ポーリー。ニッキは、このオレが助けたさ。」

「え?」

「オレに代わって、ソニック・ワールドのパワーをもつ戦士となってもらうためにな。」

「な、なんだって? そ、それじゃ、ソニック・ザ・ヘッジホッグっていうのは、ニッキの六年後の姿だというのか?」

ポーリーは、目を大きく開けてソニック・ジョーを見ました。ジョーは、また人なつっこいウインクを送ってきました。

「そういうこと。ソニック・ザ・ヘッジホッグ、ヤツは光速の壁を超えたために、過去でも未来でも自由に行き来することができる。」

「ニ、……ニッキ!」

「ただし、ふだんのニッキは、メガネをかけた今までどおりのおとなしい子だ。あの子がソニックだっていうのは、あの子自身と……、それと、たった今それを知った……、」

「このオレか?」

「そうだ。ポーリー、オヤジのあんたしか知らないことになる。なんったって、ソニック・ワールドには、まだまだ信じられないようなパワーが隠されている。これから、たくさんの科学者がそのパワーを悪用しようとねらってくることが予想されるからな。」

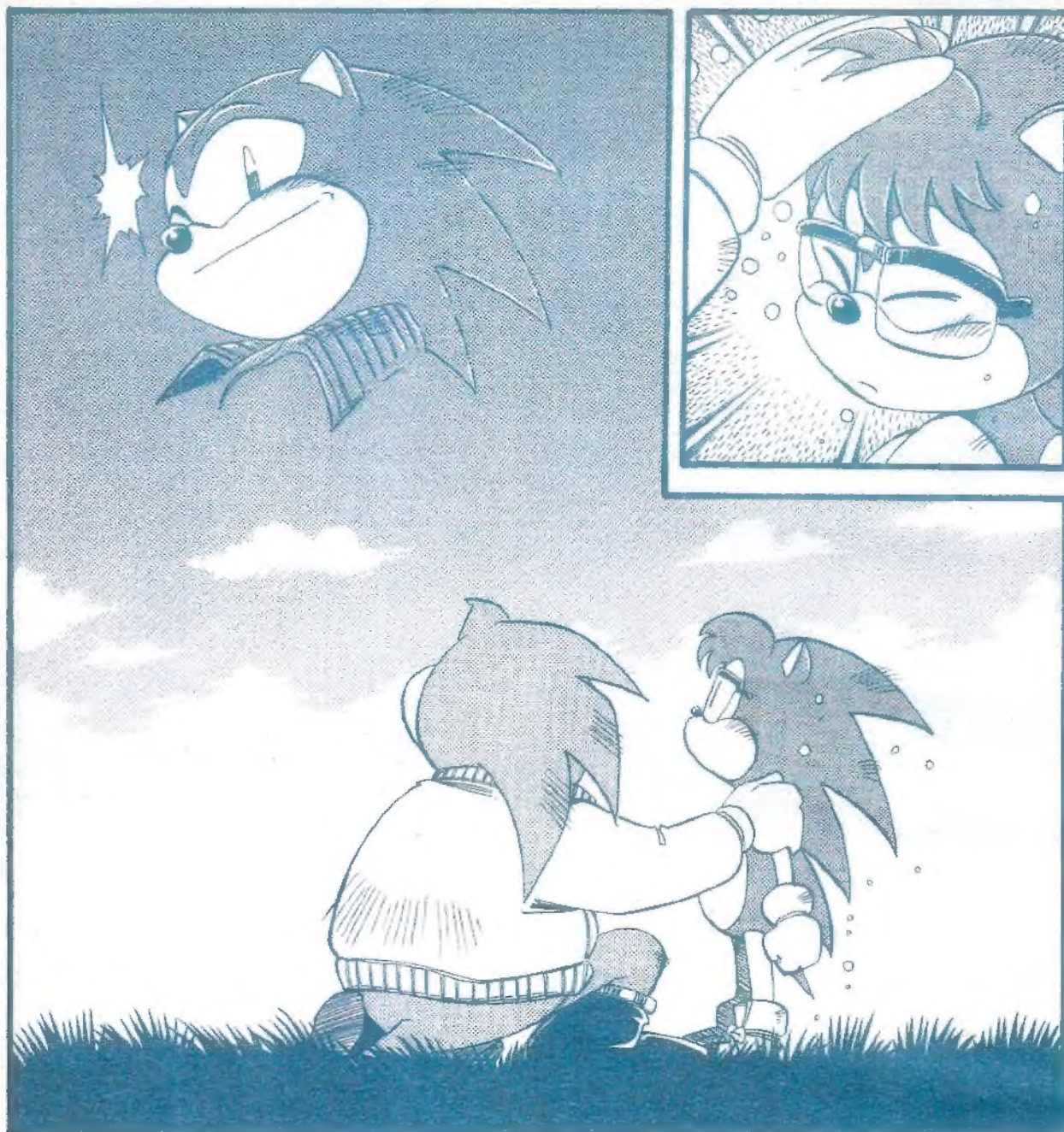
ポーリーは、今明かされた真実の大きさに、ちょっとめまいがするくらいおどろかされていました。

でも、それと同時に、カレはあることをジョーにたしかめなくてはいけないなと思っていました。

実は、さっきからソニック・ジョーの姿が青い光の中に次第にかき消えそうになっていたのです。
「ジョー……。」
「ん？」
「お前。さっき、このオレに代わってって言ったな。まさか、お前……。」
「そのまさかさ、ポーリー。」
「え？」
「オレは、ソニック・パワーのおかげで、なんとか今まで生きてこれた。少なくとも、この光速の〈ミゾ〉にいることとだけはな。でも、それもここまでだ。」
「ジョー！」
ジョーの姿が、足のほうからだんだん消えていきます。
「せめて、オレの口から、あんたのムスコ、ソニック・ザ・ヘッジホッグの秘密をしゃべることができて、よかったよ。天国で、待ってるぜ。……グッドラック！」
パシュ～！ その時、すさまじい光のウズがポーリーを包みこみました。

「ソニック・ジョ～～～！」
ポーリーは、手のひらで光をさえぎりながら、ひっしに親友の名を呼びました。
でも、すぐに青い光のウズは、ポーリー一人を地面に残して、はるか上空に吹き飛んでいったのでした。
「ジョ～～～～～～～～！」
ポーリーは、空の一点に吸いこまれていく光のオビに、せいイッパイ大きな声で叫びました。でも、もうジョーの声は聞こえてきませんでした。
ポーリーは、これでやっとアイツも天国に行けたのだな、と思いました。

†

パッシャ～ン！ ソニックは、〈カエルンバ〉をメッチャクチャにして、湖にたたきこみました。
「キャア～！ ありがとう、ソニック！」
タニアとエミーが大喜びで、湖のほうにかけだしていきます。ポーリーも、そのすぐ後を追いました。
でも。
「あれぇ～？ ソニックは？」
そうです。ソニックの姿がどこにも見えないのです。
「おかしいわねぇ。たしか、このあたりに大きなカエルを投げこんだはずなのに」
と、エミー。まだ波だつ湖面を見渡しました。
すると、どうでしょう！「ぷはぁ～！」っと情けない声を出して、湖の中からニッキが顔を出したのでした。
「キャア～～！ ニ、ニッキ！ こんなトコで何してたの？」
「え？ な、何って、飛行機の無線で応援を頼もうとしたら……、」
「ああ～、わかった！ お兄ちゃん、湖におっこちちゃったんでしょ～！」

タニアが、そう言って笑いたてました。

「チェ～！」

ニッキは、またドジをやっちゃったなぁ、と頭をかきました。でも、その時、お父さんがニッキに手を差し出してきました。

「へ？」

お父さんの顔が笑っています。ニッキは、お父さんの手につかまって湖から抜け出しました。

それからお父さんは、ニッキのぬれた髪の毛をとかして、体を抱き寄せるようにすると、なぜか空の一点を見上げました。

「――――？」

ニッキも、お父さんにつられるようにして、空を見上げました。

すると、何か青い光がいっしゅんかがやいたように見えました。

ニッキには、その光が一体なんなのか分かりませんでしたが、なぜだか、お父さんが自分にその光を見るように言ったような気がしたのです。

そして、あの青い光の美しさをけっして忘れるんじゃないよ、と――――。

『ソニックの大冒険』おわり

●応えんありがとう。バイバイ！